

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No. 74 2025年12月

NPO／NGO等支援	ローコード開発とフルコード開発のはざまで — Good LinksシステムのGUI改善業務 —	2
自治体・中小企業支援	海外CEO商談会で中小企業者の海外事業展開を支援	3
	地域の力と創造をつなぐ—小田原箱根商工会議所と連携した中小企業支援の成果 ～エストンラボラトリ社展示会支援の軌跡～	4
教育支援	中央大学でのゲストスピーカーを終えて	5
	子供たちの輝く笑顔あふれる未来に向けて	6
	高校生国際交流の集い2025	8
国際イベントへの協力	東京2025世界陸上競技選手権大会ボランティア活動報告	9
	初めてのボランティア・MOWAの活動を終えて	10
プロジェクトの受託	在日ブラジル人大学生を支援	11
事務局だより	会員懇親会を開催	7
	会員の種類	12
	正会員／賛助会員一覧、活動会員数	12
	賛助会員入会のお願い	12

**特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community** www.abic.or.jp

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1
霞が関コモンゲート西館20階
Tel : 03-6268-8604 Fax : 03-6268-8652
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

NPO/NGO等支援

ローコード開発とフルコード開発のはざまで — Good LinksシステムのGUI改善業務 —

技術工房 創 いわもと しんいち
岩本 信一



Civic Forceとの出会い

2024年10月に地方自治体・中小企業支援分野の活動に関心がありABICに登録したところ、個別の面談をしたいとの連絡を受けた。この分野は業種・取扱商品・求められる職能等が多岐にわたるため、経験や希望などを聞いてもらえるとのことであった。10月11日に担当コーディネーターとの面談があり、そこで紹介されたのが公益社団法人Civic Forceの案件であった。

Good Linksシステム

Civic Forceは、誰もが相互に協力し合い、市民（Civic）の力（Force）で災害に強い社会をつくるというビジョンの下、Good Linksという物資・サービスの支援マッチングシステムを運営管理している。要は、災害などに対して、支援をしたい企業と、支援をしてほしいNPOとを有機的につなぎ、物資やサービスが円滑に流れるようにする仕組みを提供しているのがGood Linksシステムである。

依頼内容は、現行システムの利用拡大に伴いシステムの見直しを行い、サービスを改善するというものである。求人要項では、2024年10月から年度末までの業務ということであったが、私との業務委託契約では11月下旬から年度末で、その後契約は延長され2025年6月末までになった。

システム改修

Good Linksシステムは、MicrosoftのPower Apps/Pagesというローコード開発環境を使って開発されている。ローコード開発とは、最小限（ロー=Low）のプログラム記述でシステムを開発する手法である。これに似た言葉としてノーコード開発があり、これは一切プログラムを記述せずに開発を進める手法。これらに対置する手法としてフルコード開発があり、さまざまなプログラム言語を用いてシステムを開発する方法である。



Good Linksトップ画面

例えれば、カレーライスのカレーを作るのに、ノーコードとしてはレトルトカレーで、ローコードとしては市販のカレールーを用いて、フルコードとしてはスパイスを調合して、ということになろうか。システム開発でもカレー調理でも、開発工数（＝費用）と開発期間（＝調理時間）を考えると、ノーコード < ローコード < フルコードの順でそれらが増えることになる。逆に、システムにおける柔軟性（＝好みの調整）が弱くなってしまう。

私が依頼された実際の作業は、開発業務ではなく、Civic Force側の立場に立って、GUI^(*)の再検討、開発会社との調整、改修成果物の受け入れ試験を行うのが主な役割であった。GUIの再検討では、まずは現行システムのGUIを理解する必要があるが、私はWebシステムのフルコード開発は十数年の経験があったものの、ローコード開発は未経験であった。そこで、現行システムを深く理解するために、Power Apps/Pagesで開発されたWebページと同じ内容（一部機能）を自宅サーバー上にフルコード実装してみた。これにより、Power Apps/Pagesによって生成されたコードスタイルが理解でき、フルコード実装との違いが実際的に分かるようになった。この知識は開発会社と改修内容を調整する上で有意に機能したと思われる。

(*) GUI (Graphical User Interfaceの略語) とは、コンピュータ画面上に表示されるボタンやアイコン（例えば、ごみ箱の絵）などの視覚的要素（グラフィック）に対して、マウスなどを使って直感的に分かりやすく操作できるようにした操作方法のこと。

おわりに

社内業務システムを短期間で開発するには、一般にローコード開発が有効だといわれている。Good Linksシステムはそれより汎用なシステムであるが、諸般の事情によりローコード開発を採用した経緯があり、ある程度柔軟性を犠牲にした部分があったと思われる。しかし、今回の改修でかなり汎用なシステムに仕上がったと思う。これはひとえにCivic Forceと開発会社のご努力によるものと痛感する。

ローコードでの開発現場の一端を経験する機会を与えてくれたABICのコーディネーターおよび関係者にこの場をお借りし感謝申し上げる。

ご参考 : <https://goodlinks.civic-force.org/>
<https://www.civic-force.org/index.html>

自治体・中小企業支援

海外CEO商談会で中小企業者の海外事業展開を支援

なかにし いさお
中西 功 (元 豊田通商)

独立行政法人中小企業基盤整備機構（中小機構）が毎年行っている海外CEO商談会にて、ABICより私を含め4人が商談会のファシリテーターとして専門的な支援をさせていただいた。

海外CEO商談会とは、中小機構が例年行っている中小企業振興事業の一つで、海外展開を目指す日本の中小企業と、日本の企業との連携を希望する海外企業の経営者とをマッチングさせる商談会である。2025年は、大阪・関西万博の開催に合わせ、5月から10月までの半年間にわたり、毎月5日間程度の頻度で、一般商材からAIや再生医療といった最先端技術まで、幅広い分野を対象に、大阪と京都の会場で行われた。例年は主に東京で開催されていたが、今回は大阪・関西万博に関連付けられたイベントとして、10月までは関西での開催となり、関西在住のABIC会員が初めて参加することになった。

海外からの参加企業は、インド、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、台湾からで、いずれも若く、エネルギーに満ちあふれた若い経営者が集まった中で、特にインドからの参加が多かった。インドの企業においては、「Make in India」のスローガンの下で、商品を売ったり買ったりというよりは、日本の技術を導入して合弁事業にして印度でつくりたいという話が多かった。海外企業も日本企業も代表者同士の商談会であったので、一つの商談会は50分という限られた時間であったにも関わらず、それなりに結論を出し成果を上げることができた。

対象とする商材は、樹脂や金属といった従来からの一般商材に加えて、AIを活用したロボットやドローンなどのDX関係、最先端の再生医療やニッチな医薬品・化粧品・健康食品、さらにはサステナブルな社会のための環境関連とバラエティーに富んだものであった。最先端の技術については今回新たに学ぶことも多く、また医療関係では医学専門用語の応酬に頭が真っ白になり悪戦苦闘する場面もあったが、商談会のファシリテーションという役割につい



商談会場にて（筆者）

ては、なんとかお役に立てたのではないかと考えている。ABICからの参加者の専門分野はさまざまであるものの、まさに総合商社OBならではの幅広い知見と柔軟性が発揮できた良い機会ではなかったかと考える。

一方で日本企業はどうかと振り返ると、全般的なイメージとしては少し物足りないというか、熱量が少ないと感じた。日本の中企業としては、円安に乗じて成長が期待できる海外展開を目指すべきと考えているものの、外国語でのコミュニケーションができない、英語での資料も用意していないという、商談会に参加する以前の問題もあるように感じた。

外国企業と話をしていると、今回は日本で日本企業のみとの商談会であるが、常に中国企業と比較検討していることがうかがえた。品質や信頼性については日本企業に一目を置いているものの、技術についてはほぼ互角、価格とスピードは圧倒的に中国が優位ということで、政治の動向に配慮しながらパートナー企業の選別をしているようで、インド企業はまさにモディ首相の全方位外交に沿った活動なのかと勝手に理解した。

日本企業と話をすると、円安の今こそ日本でモノづくりをして、輸出によって国内事業の停滞を開拓したいところではあるが、中小企業では人手不足もさらに深刻化しているようで、今回の商談会では海外への製造委託の案件もいくつかあった。また、製品の輸出ではなく、生産設備を含めた生産技術の販売の案件もあり、日本のモノづくりも新たなビジネスモデルへの変貌の時期にきているように感じた。

今回の関西でのCEO商談会については、大阪・関西万博の閉幕とともに一旦終了となるが、またこのような機会があればぜひ参加し、日本のモノづくりの新たなフェーズに微力ながら貢献できれば幸いである。このような機会を提供いただいたABICに感謝申し上げる。



商談会場の様子

自治体・中小企業支援

地域の力と創造をつなぐ—小田原箱根商工会議所と連携した中小企業支援の成果 ～エ斯顿ラボラトリ社展示会支援の軌跡～

いとう せいじ
伊藤 精二 (元 ソニー)

きっかけは商工会議所からの1件の求人情報

ABICは、小田原箱根商工会議所（神奈川県）と連携協力に関する協定書を締結し、地域中小企業の経営・販路拡大支援を進めている。その一環として、2024年9月に同商工会議所経由ABICよりエ斯顿ラボラトリ社（南足柄市）からの求人情報への応募打診が届いた。同社は木製模型の企画・設計・販売を手がける企業で、新商品として英国の名車「ケータハム セブン」の市場投入を企画しており、2025年2月に開催される「テクニカルショウヨコハマ2025」への出展を控え、展示ブースの演出や効果的な商品展示・訴求方法について専門的助言を求めていたことが支援の端緒となった。

連携で生まれた「地域ならでは」の展示演出

地域企業の発展をサポートする小田原箱根商工会議所 経営支援部 小林課長とのWeb面談での出会いから、選考を経て支援チームに参加。展示会出展の企画・実施に向けた支援がスタートすることとなった。2024年11月から翌年1月にかけ、同商工会議所での対面協議、e-mail交換にて、目標、現状、課題、日程の共有化に始まり、展示レイアウト、来場者導線設計、ブランド訴求方法など、議論と検討を重ねた。特に同商工会議所からは、過去の展示会で見えた課題への解決策として「地域性を生かした差別化の訴求」が要望され、小田原箱根の伝統的工芸品である「寄木細工」とエ斯顿ラボラトリ社の「木製模型」による「地域の技と匠を融合させた創造的プロジェクト」という挑戦的な企画へと発展した。

企画においては、同社の東代表からの工数やライセンス上の制約を尊重し、また、同商工会議所からの出展上の制約・注意事項などを踏まえ、私からはソニーでのロボット展示経験から音・映像でのキャッチ効果演出のためのプロジェクトマッピングやAIナレーション導入などのアイデアを提案した。多くを議論させていただいたが、その過程においては、挑戦的課題解決の実現に向けて合意されたPERT図^(※)による進捗管理により、大きな抜け漏れもなく本番を迎える



小田原箱根商工会議所の共同出展ブース
来場者対応中のエ斯顿ラボラトリ社 東代表（右端）

ことができた。

テクニカルショウヨコハマ2025での反響

2025年2月、「テクニカルショウヨコハマ2025」において、エ斯顿ラボラトリ社は小田原箱根商工会議所の共同出展ブースにて新規の木製模型×伝統工芸を発表。英国の伝統的なクラシック・スタイリングに寄木細工を取り入れた異彩を放つデザインは多くの来場者の関心を集め、横浜ケーブルビジョン株式会社による番組取材・商品紹介につながった。さらに、ホテル業界に販路を持つ企業からの商品の取り扱い、共同商品化の打診や、箱根寄木細工店との連携なども進展。展示会を通じ、東代表は「自社製品の魅力を外部から再発見できたことで、今後の製品開発や販路拡大へのモチベーション向上に大きな効果を得た」との感触を語っていた。



継続的な地域支援への一歩

エ斯顿ラボラトリ社は企画・設計・販売を行う木製模型メーカーとしてさらに独自性を高め、地域との連携による新たな価値創出の実現に向けて取り組んでいる。現在、同社は2026年の出展を見据えた製品開発に取り組んでおり、今回の本プロジェクトが同社の成長に貢献できたのではないかと考える。

小さな出会いから生まれたこの事例は、単なる出展支援にとどまらず、ABICと商工会議所の協働による、地域文化と企業の創造力を掛け合わせた「地域と企業の共創による継続的発展支援」の一つの形といえよう。今後も地域中小企業の経営・販路拡大支援に微力ながらも貢献していきたい。

(※) プロジェクトの工程管理に用いられる手法で、各作業の依存関係をネットワーク図（PERT図）で可視化したもの。



「英国の伝統的スタイリング」と「小田原箱根の寄木細工」融合の
木製模型モデル <https://craft.eston.jp/>

教育支援

中央大学でのゲストスピーカーを終えて

丹田 雅敏 (元三菱商事)

私は今これを書きながら、改めて友人のありがたさと偶然の不思議さを感じている。最初に、長くなるが、ABICへの感謝の気持ちを込めて、これまでの経緯を記したい。2017年に仕事を退き、「何かボランティアを」とぼんやり考えていた。たまたま会社の同期でABIC会員の鈴木重則君と会う機会があり、勧められて2020年に入会した。しかし、コロナの影響でただ時間だけが過ぎた。ようやく世の中が動き始めた頃、ABICより「日本語教師養成講座(2022年度上期)」の案内があった。海外駐在では家族も含めて現地の方々に大変お世話になったので、そのご恩返しができるかとの軽い気持ちで受講した。授業は良い教師、良い仲間に恵まれて楽しく、充実した学びができた。

2022年9月に修了後、早速地元の日本語ボランティア団体に連絡すると、たまたま欠員が出たばかりで、すぐに活動を始めることができた。また、2023年春にはABICから声をかけてもらい、ABICがお台場の東京国際交流館で運営している「日本語広場」の講師を務めることになった。ぼんやりとした「何かボランティアを」が、ABICのおかげで突然リアリティを持って動き始めた、自分でも驚きの1年であった。

さらに、2024年9月のABICの会員懇親会で、これも会社の同期でコーディネーターの増井哲治君と出会い、「昔取り組んだプロジェクトファイナンス^(*)についてなら何か話せるよ」と言ったことが、わずか3ヵ月後の12月に中央大学経済学部 近廣昌志准教授の金融論ゼミでの講話につながった。

講話のタイトルはすぐに「プロジェクトファイナンス(PF)概要」に決まった。しかし、引き受けたはみたものの、まったく初めての経験であり、学生に間違ったことを伝えるわけにはいかないと緊張した。昔を思い出しながら、参

考書を引っ張り出して、パワーポイントにまとめていった。分かりやすくかつ飽きないように表やイラストや動画を入れ、色使いにもこだわった。中身をまとめるよりも表現の方に労力がかかったのは予想外であった。また、プロジェクトファイナンスの用語や概念は英語をそのまま使うものが多く、学生にどうかみ碎いて伝えるかも難題だった。「日本語広場」での「やさしい日本語をつかう」経験が思わぬところで役に立った。

いよいよ当日、2コマ(2、3年生)のゼミで講話を行った。学生たちは私の話を真剣に聞いてくれ、質疑も活発に行えた。ゼミ教室という限られた空間に、自分がとうの昔に失った若さが持つエネルギーが満ちていて、終わってほっとすると同時に何ともいえないしさが込み上げてきた。

これをきっかけに、近廣准教授が非常勤で教えておられる立教大学と本務の中央大学の大教室でも同様の講話を行った。毎回、任意提出のスリップを配布して、講話の講評(6項目×5段階評価)、質問、意見、感想を書いてもらった。回収総数122人で、質問35個、意見5個、感想84個であった。質問、意見は的確なものばかりで、回答やコメントを作るのが楽しい作業だった。最近の学生は授業の出席率が高く、課題の取り組み姿勢も真面目と仄聞していたが、それを実感できたのは大きな収穫だった。

仕事を退いた時は今のような展開をまったく想像もしていなかった。さまざまな機会を与えてくれたABICに改めて感謝するとともに、これからも友人と偶然の機会を大切にして年を重ねていきたい。

(*) 新事業の将来の収益や資産のみを返済原資とし、事業の出資者は借入金の返済義務を負わない融資の方法



講和の様子



質疑の様子

教育支援

子供たちの輝く笑顔あふれる未来に向けて

や は ぎ の り よ
矢萩 典代 (元丸紅)

今から15年前、丸紅（大阪）に勤務していた私は、ABIC創立10周年記念懇親会（大阪）の手伝いに参加し、企業OB・OGが社会貢献に取り組む意義を伝える勝俣会長（当時）のごあいさつを印象深く伺った。時がたち2023年、知己の世話人に声がけいただき入会。その初の活動で今回SDGsをテーマとする大阪府立箕面高等学校の出前授業に赴いた。

2015年の提唱から10年。現役高校生がSDGsをどう捉え、どんな話が若者に響くのかを考えながら、私自身の活動を振り返った。2020年3月丸紅を退職、翌4月から縁あって兵庫県三田市の広報・交流政策監となった。コロナ禍突入の頃だったが、私のミッションは広報や観光、町づくりの施策により市内外にファンを増やし、人口減少にも負けない持続可能な町を目指すことで、①観光振興で交流人口を増やす『さんだまち博（三田の町を遊ぶ博覧会）』、②故郷の自然環境を未来に伝える『三田さくら物語』、③次世代を生きる子供に笑顔と元気を贈る『新宮晋元気のぼりプロジェクト』を立ち上げた。今回の授業ではその中から今も私が携わる「元気のぼりプロジェクト」について、SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」と目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」の観点から紹介した。

三田市在住で風の彫刻家として世界に知られる新宮晋氏が、東北大震災を機に始めた「元気のぼりプロジェクト」は、大きな白布に子供が友達や家族と一緒にのびのび自由に絵を描き、出来た作品を大空に掲げ、地球の上を吹く風に舞う『元気のぼり』が見る人に元気を贈るという事業。アーティ



風に国境はない、風に舞う「元気のぼり」



新宮晋氏作「風の歌」前で（右から和又真一郎ABICコーディネーター、筆者、大川智箕面高校校長、久保広正ABIC会員）

トという世界共通の言葉を使い、子供が互いに笑顔でつながっていく様子は見る人にも笑顔を届ける。授業では、未来に生きる子供に向ける氏の思いに共感し、より多くの人にこの魅力を伝えたいと思い、現在、仲間と共に大阪・関西万博会場での「元気のぼりプロジェクト」実現に向けて活動していることを話した。教育問題に関心が高いとのことで、多くの生徒が聴講してくれたが、いわゆる学校の教科とは違う、心を育む教育の大切さを紹介したつもりである。

目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」にも触れた。万博での実現に向けて一緒に取り組むのは、一般



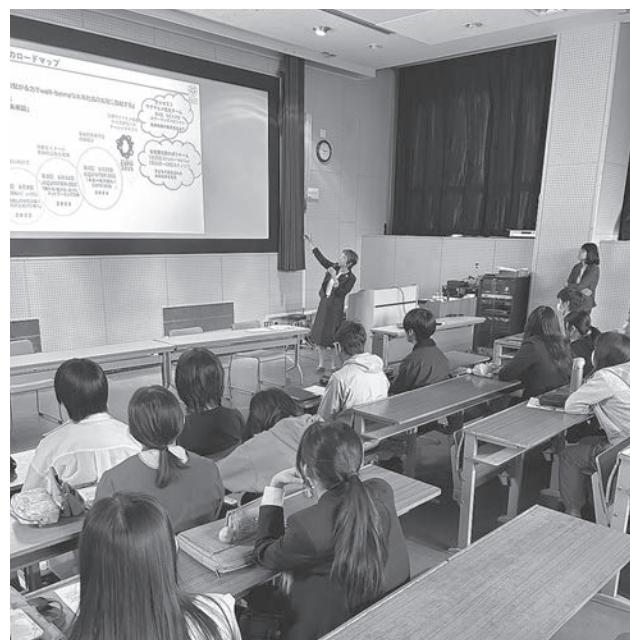
大阪・関西万博大屋根リングの前、万博サクヤヒメ会議の17人で（後列左から2番目が筆者）

教育支援

社団法人万博サクヤヒメ会議の仲間。ユニークな命名だが、大阪商工会議所が在阪企業で働く管理職の女性を対象に、後進女性のロールモデルとなることを目的として2016年に設けた「大阪サクヤヒメ表彰」第1期受賞者の内の17人で創った組織で、大阪での万博開催が決まった2018年に私たちも何か行動したいと発足した。検討を重ね、①女性活躍という言葉がなくなる社会を目指したい、②次世代を担う子供に働く楽しさを伝えたい、そして③未来に生きる世界中の子供に笑顔と元気を贈りたい、と始めた三つの活動の一つがこの「元気のぱりプロジェクト」である。

メンバーに共通するのは育ててもらった地域や社会に恩返ししたいという思いで、年齢や業界、環境はさまざま。できる人ができるコトができる時に、が私たちのモットーだが、一人ではできないことが、共に考え悩み、工夫を凝らす間にいつの間にか前進かなっていると皆が実感しており、授業ではパートナーシップでやり遂げる醍醐味を紹介した。

SDGsのヒントは身近な生活の中にある、気付いたら口に出し行動してみる、自分がワクワクしなければその楽しさは人に届かない、と結んで授業を終えた。商社で働いた縁で、商社OBが校長に就いておられる箕面高等学校で出前授業の機会を得たが、テーマに挙げたその新宮氏が40



授業の様子

年も前に同校に作品を寄贈していたという偶然の縁も重なった。生徒たちが私の拙い話に少しでも何かを感じ、それが記憶の片隅にとどまり、次の世代に伝えていってくれたら、これほどうれしいことはないと思っている。

事務局だより

会員懇親会を開催

2025年9月18日（木）、霞山会館（千代田区霞が関）において会員懇親会を開催し、活動会員、正会員、役員、日本貿易会関係者など116人にご参加いただきました。安永会長の開会あいさつ、徳田理事長の乾杯発声に始まり、会員の皆さんに和気あいあいとご歓談いただき、盛会のうちに閉会しました。



安永会長



徳田理事長



懇親会風景

e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく！

e-mailアドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。特にe-mailが届かない例が増えています。

e-mail : mail@abic.or.jp FAX : 03-6268-8652

教育支援

高校生国際交流の集い 2025

いたくら なおと
関西デスクコーディネーター 板倉 直人（元丸紅）

8月4-5日、真夏の関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスに、2025年で19回目となる「高校生国際交流の集い」に参加する高校生と留学生が集まった。

関西学院大学・ABIC共催のこのイベントは、同大学の研究推進社会連携機構と学生組織KGIH (Kwansei Gakuin Global Inspiration with Highschool) のスタッフが年初からABICを含めた関係者と連携を取りつつ準備してきたものである。今回は兵庫県立兵庫高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪府立箕面高等学校、大阪府立豊中高等学校、大阪府立千里高等学校、啓明学院高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部、帝塚山学院高等学校の9校から計40人の高校生、米国、コスタリカ、トルコ、フィンランド、ドイツ、タイ、オーストリア、マレーシア、ポーランド、イタリア、フランスの11ヵ国から計12人の日本の高校に留学している留学生、そしてKGIHのスタッフ13人が両日参加した。

今回のイベント・スローガンは「Discover the new you, share your view ~新たなひらめき、広がるつながり~」で、関西学院大学副学長・研究推進社会連携機構長の土井教授による開会スピーチでスタートした。オープニングレクチャーでは、ABICの岡井加代会員が登壇し、「communication」をテーマに、自身の留学体験をベースとした講義を行った。

初対面の高校生たちは、最初は緊張の面持ちだったが、昼食と体育館でのレクリエーションを通じてすっかり打ち解け、午後からは七つのグループに分かれて、事前にピックアップされていたSDGsの目標の達成に向けた解決策について、活発なディスカッションを行っていた。2日目に入ると、KGIHスタッフのアドバイスも受けながら、プレ

ゼンテーションに向けたパワーポイント資料作り、発表方法の具体的な詰めをグループ一体となって行っていた。

プレゼンテーションでは、ABICからは岩田事務局長と私のほか、ABIC内公募に応募された寺田好純会員、岡本芳幸会員、久米川武士会員、神山秀夫会員の4人がグループ発表の審査を行った。閉会式では、岩田事務局長によるスピーチの後、審査結果が発表され、上位入賞グループに岩田事務局長より表彰状と商品が授与された。最後に、関西学院大学 研究推進社会連携機構 社会連携・インキュベーション推進センター長の片山教授より参加者全員に修了証が授与された。

今回もKGIHのスタッフが要所要所での的確なアドバイスを高校生たちに伝えることで、プレゼンテーションのクオリティーが高く維持され、「高校生国際交流の集い」全体の盛り上がりをもたらしていたと感じた。また、初めてABICの会員に本イベントに参加いただき、ABICの活動を知っていただけたことは意義深かったと思う。今後も関西学院大学・KGIHのスタッフと連携・協力して、この素晴らしいイベントをさらに盛り上げていきたい。



フレゼンテーション風景



参加者全員で

国際イベントへの協力

東京2025世界陸上競技選手権大会ボランティア活動報告

たなか こういちろう
田中 孝一郎 (元 Citibank, N.A.)

2024年10月にABICからのメールで、2025年9月13日より21日までの9日間、34年ぶりに東京にて「東京2025世界陸上競技選手権大会」(World Athletics Championships Tokyo 25) が開催され、大会運営サポートのボランティア活動員を募集していることを知った。

スポーツイベントのボランティア活動に参加するのは初めてであったが、運営サポートの一員として応募し採用された。当初募集人数は3,000人程度であったが、8,200人を越える応募があったため、最終的に3,400人が国立競技場をはじめ5会場で23の役割に振り分けられることになった。

4月にオリエンテーションに参加し、大会に関する基礎知識や役割を学び、各自のシフトと活動場所・役割が決まった。

大会からは写真のようなユニフォーム（ポロシャツ、パンツ、シューズ、キャップ）のほか、レインジャケットとナップザックが支給され、大会を素晴らしいものにしたいという気持ちと情熱がますます高まった。

私の活動内容はアクレディテーション (Accreditation)、東京体育館にて大会会場および運営エリアなどへアクセスするための大会関係者用識別カードの発行を担うことであった。

私はモーニングシフト (7:00-14:00) を希望し、9月3日と9月8日-10日までの4日間のボランティア活動に従事した。初日はボランティア活動のプロのような方とペアを組み、大会関係者がスムーズに本人確認と識別カードの写真を撮ることができるようブースへの案内を担当した。2日目はなんと熊本からボランティア活動に参加した女性とペアを組み、会場入口での案内を行った。3日目は現役陸上競技選手の女子学生とペアで、識別カードの作成作業を行い、最終日の4日目は子育て中の現役ママとペア

で、初日と同様な役割を果たした。特に初日にペアを組んだ方は数多くのスポーツイベントのボランティア活動に参加し、前回のハンガリー・ブダペスト大会でもボランティア活動を経験しているとのことであった。彼のアドバイスを受けながら、やや緊張していた初日の活動を通して「おもてなし」の心だけでなく、日本の方も外国の方もお互いあいさつをしながら自然と笑顔で感謝の気持ちを伝えることができたと感じた。

わずか4日間のボランティア活動であったが、日常生活では出会う機会が少ない仲間と知り合い、新たな視野を広げることができ良い経験となった。

ボランティア活動後、ボランティア枠で9月13日大会初日の午前中枠チケットを購入し、初めて国立競技場で(1)男女別35km競歩決勝、(2)女子円盤投げ予選A・B、(3)男子砲丸投げ予選A・B、(4)男子100m予備予選、(5)男女混合4×400mリレー予選を観戦した。男子35km競歩の決勝は、目の前を勝木隼人選手がすごいスピードで歩き抜けていき、競技場の観客の大きな歓声と共にわれわれ夫婦も手をたたき声援を送った。他の競技種目はテレビで観ることはあったが、選手たちを目の前で観ることができ、新たに興味を持った。

特に男女混合4×400mリレー第2走者の井戸アビゲイル風果選手の走りに驚き、日本新記録での初の決勝進出を目の当たりにすることができた。

今まで知らなかった選手たちの名前と競技に少しばかり詳しくなったので、今後も陸上競技選手たちを応援していくと思う。

(事務局注：ABICからは29人の活動会員が各種運営サポートのボランティア活動に参加した)



アクレディテーション
センター入口



国立競技場



支給されたユニフォームを着用する筆者

国際イベントへの協力

初めてのボランティア・MOWAの活動を終えて

とくさ まさあき
木賊 正明 (元三井物産)

この度、ABICからのメールでMOWAのボランティア募集を知り、ボランティア活動に参加させていただいたので、その内容や私の感じたところを紹介させていただくこととする。

本件の案内を受けた時に、MOWAと世界陸上との関係がどのようなものなのかが理解できており、まずは、MOWAとは何かを調べるところから始まった。

MOWAとは「Museum of World Athletics」の略で、過去の世界陸上、オリンピックのメダリストなどから寄贈されたユニフォーム (Singlet)、ゼッケン、シューズ、メダルなどを世界陸上開催に合わせて開催都市で展示するというミュージアムであることが分かり、私のような陸上競技のファンにとっては、非常に魅力的なボランティア活動であると思い、ぜひとも応募させていただいた。

実際の活動は、7月7日から世界陸上閉幕の9月21日までの間、都庁の第一本庁舎の2階のロビーと45階の展望室に展示された展示物、および、45階のモニターで見られる1991年東京大会の映像を来場者に紹介し、説明することだった。個人的には大好きであったカール・ルイスの100m決勝の映像を来場者がいない時に30回くらいは見させていただき、ボルトとはタイプの違う軽やかで華麗な走りに感激を新たにした。

いろいろな展示物と併せて、実寸大の世界記録（棒高飛びの高さ、走り高飛びの高さ、走り幅跳びの長さ）を見られる展示や、ハンマー投げのハンマー、砲丸投げの砲丸、やり投げのやり、ハードル走のハードル、さらには、最後の周回に鳴らされる鐘の実物に実際に触れられる展示もあり、幼稚園生からお年寄りまで、国籍を問わず、皆さんのがこぞって実物に触れ、鳴らし、高さ、長さ、重さ、大きさ



世界陸上のマスコットのりくワンと

に驚かれる姿に接し、日々楽しさが増していく。

また、ある日、海外から来た家族連れに展示の見どころを英語で説明したところ、最後に「Thank you! Your explanation was very helpful.」と笑顔で言われたことがあり、その瞬間、自分が役に立てたのだと実感し、とてもうれしくなった。このボランティア活動を通して、私は「伝えることの大切さ」、そして「心は世界共通であること」を痛感した。世界中から集まる人々と日々触れ合いながら、スポーツが国境を越えて人々をつなげる力を持っていることも実感した。

加えて、MOWAのオープニングセレモニーとドネーションセレモニーという二つの大きなイベントにも参加させていただいた。小池都知事をはじめ、世界陸連のコーワー長他幹部、日本陸連の有森会長、元マラソンの谷口選手、野口選手、君原選手などと共に、世界各国の元有名選手と今回の世界陸上の競歩で優勝したダンフィー選手などとも交流できたことが、非常に楽しくうれしい思い出となっている。

私はこれまで、中学校から大学卒業まで陸上競技に取り組み、大学卒業後も入社4~5年目まで実際に走り、さらに大学OB会にも関わるなど、陸上競技とのご縁がずっと続いている。大学の先輩からの勧めもあり、「日本陸上俱楽部」（設立：1973年、会長：瀬古利彦氏）に入会し、現在は世話を務めている関係で、引き続き陸上競技から離れることがない日々を送っている。

この先も陸上競技にできる限り携わりながら、さらに見聞を深めていけたらと思っている。

(事務局注：ABICからは14人の活動会員がボランティア活動に参加した)



世界陸上35km競歩優勝のダンフィー選手と

プロジェクトの受託

在日ブラジル人大学生を支援

ほりうち ともひさ
堀内 智久 (元三井物産)

2025年度より開始した在日ブラジル人への大学奨学金制度（給付型）の運営を、三井物産株式会社からABICが業務委託され、私たちブラジル教育支援プロジェクトチーム（以下、PT）がその業務を担当している。この制度は、三井物産がブラジルで幅広く事業を展開する企業として、日伯相互理解の深化と在日ブラジル人コミュニティーが抱える課題の解決に向け、優秀な奨学生を育成・支援することを目的としている。以前から行ってきた在日ブラジル人学校（小・中・高校生）奨学金制度を大学生まで拡張し、一気通貫体制を確立して、日本はもとよりグローバルに活躍できる高度人材を育成・支援するものである。

三井物産は2024年のはじめより当制度の設計に入り、三井物産の担当者とABICのPTメンバー5人による幾多の議論を経て、同年9月に制度を公表し、募集を開始した。早々に学生からさまざまな問い合わせを受け、上々の滑り出しかと思われたものの、その後は動きがなくなり、PT内では「在日ブラジル人には大学進学希望者はあまりいないのではないか」との一抹の不安もよぎった。実際に、他のNPO法人などから「大学進学へのモチベーションや、日本への期待値は低い。専門学校への進学者が多いのでは？」などの意見も聞かれ、不安はさらに増幅する始末であった。

それでも、いくつかのNPO法人を通じた公立・私立高等学校、在日ブラジル人学校への周知活動を強力に推進し、新たなNPO法人に働きかけるなどのアプローチを実施。公益財団法人国際交流協会などを通じた情報発信にも努めた結果、これらの対策が功を奏したのか、在日ブラジル人を購読者にもつポルトガル語の雑誌などに取り上げられるなど、着実に認知度が高まっていることを実感できるまでになつた。

PT内では当初から「学生は忙しいからギリギリまで申請してこないだろう」と予測していたが、これがまさに的中したと判明したのは12月に入ってからのことだった。

記録によると、奨学生希望者からの50件の問い合わせの

うち、実に7割近くは12月に入ってからであり、採用者4人の10倍以上の申請のほとんどは1月31日の締め切り目前にPTに届いたものだった。さらにそのうち10通を超える申請が、紙の書類で締め切り当日にまとめて郵送で届き、その申請書類をPDFに仕上げてPT内で共有する作業だけでも相応の労力を要したのが実情であった（その実態を踏まえ、2026年度申請はPDF添付のメール提出のみに変更した）。

初年度としては、最終的に41人の申請者を集められたことは成功といってよいと思う。全ての申請書類を読み込み、書類選考で13人を一次選抜しオンラインで面接、最終選抜を行った。そこで制度の趣旨に合致し、今後一緒に活動できる人材を選定し、三井物産・ABIC合同の選定委員会による厳正な審査を経て、採用者4人を全会一致で決定した。

第1期奨学生の4人全員が女性であったのは全くの偶然である。人柄はもちろんのこと、そのモチベーションの高さは素晴らしい、それぞれが思い思いの専門性を大学で身に付けようとする傍ら、学外ではイベント活動や多文化共生活動を通じて在日ブラジル人の後輩たちのモチベーション向上をはかり、さらに成長しようとしている奨学生の姿を見て、誇らしく思う次第である。

9月に入り、2026年度の申請を受け付け開始。初年度の経験・ノウハウを生かして、優秀な人材を採用したいと思っている。そして、4年後には最大16人の在日ブラジル人大学生と常に向き合っていくことになる。PTメンバー一同、一致団結し、重要プロジェクトの運営に尽力していく所存である。

なお、PTメンバー5人は全員が三井物産OBかつブラジル駐在経験者であり、ブラジル人の文化・習慣などを熟知している。三井物産と共に本奨学金制度を盛り立て、誠心誠意運営することが、在日ブラジル人の支援、ひいては日伯友好の一助、架け橋となると強く信じている。



会員の種類

種類	内容	年会費
正会員	センターの目的に賛同し、活動を推進し、会費を納める個人、法人および団体。(理事会の承認を得て入会)	法人および団体 1口 50,000円
		個人 1口 10,000円
賛助会員	センターの目的に賛同し、会費を納める個人、法人および団体。	法人および団体 1口 10,000円
		個人 1口 5,000円
活動会員	センターの目的に賛同し、活動に参加しようとする個人。	なし

(2025年10月末現在)

正会員

法人・団体（17社、1団体）〈社名・団体名五十音順〉

- 〈10口〉 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) (一社)日本貿易会 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
- 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 日鉄物産(株) 阪和興業(株)
- 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) 三洋貿易(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（13名）〈敬称略・氏名五十音順〉

- 〈3口〉 中村邦晴
- 〈1口〉 池上久雄 市村泰男 岩城宏斗司 岡 素之 國分文也 小林栄三 小林 健
- 佐々木幹夫 寺島実郎 宮原賢次 宮本史昭 吉田靖男

賛助会員

法人・団体（2社、1団体）〈社名・団体名五十音順〉

- 〈2口〉 (公社) 東京のあすを創る協会
- 〈1口〉 (株)エックス・エヌ JAPAN WAY(株)

個人（171名）〈敬称略・氏名五十音順〉

下記は2025年6月以降にご入会いただいた方々です。

- 〈1口〉 杉山直也 高田成人 中橋和久 傅 文彬

活動会員 3,044名

賛助会員入会のお願い

ABICの目的にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、ならびに法人および団体の皆さまのご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1 霞が関コモンゲート西館20階

TEL : 03-6268-8604 FAX : 03-6268-8652 E-mail : mail@abic.or.jp